

長崎ランタンフェスティバルと中国灯会の比較について

—中国人観光客誘致への示唆—

国際東アジア研究センター 協力研究員 彭 雪

長崎ランタンフェスティバル（中国では「灯会」とも呼ぶ）にずっと前から憧れていた。この2月の始めに、念願の旅がようやく実現した。とても素晴らしい祭の中で、一番印象に残ったのは、日本に居ながら中国風の要素をたっぷりと味わえることである。会場では、龍踊り・雑技・獅子舞・皇帝パレードなどのイベントから、豚の頭を祭った台・ランタン・提灯、旗などの飾りまで、全てにおいて伝統的な中国風の雰囲気は漂っていた。

しかし、これらの風景は私が生まれ育った中国のイメージとは少し違う気がした。ランタンフェスティバルの会場を彩っているのは、欧米・香港の映画でよく見る「昔の中国」のイメージなのだ。一般的に人々が「伝統的な中国風」と感じる典型的な要素をできるだけ多く集め、観光客の目の前で一堂に公開することで、雰囲気を盛り上げているのである。それは確かに「中国らしい」ものではあるが、現在、中国各地で開催されている同様のイベント「元宵節」の「灯会」とは、はっきりとした違いがある。その違いとは、具体的に以下の二点である。

第一に、長崎ランタンフェスティバルのランタンは、主に伝統的な特色を持ったモチーフで作られているのに対し、中国灯会のランタンには、現代の要素を取り込んだデザインも沢山あり、伝統的なテーマを表現する場合においても、幾何学模様や動物、植物などの形のランタンに、大胆に現代的なアニメ風のデザインを使っている。中国は時代の変化と市民のニーズなどに合わせて、革新的な表現を追求しているのである。

逆に、長崎においては、「中国の伝統的な特色」を全面に出すことが、セールスポイントになるとも言える。ランタンフェスティバルが、この時季の長崎において、国内外から観光客を誘致する目玉イベントになっていると言っても過言ではないであろう。そのため、長崎では、今まで親しんできたランタンフェスティバルの特徴や、伝統的な中国風文化の表現を変えることに対して慎重な態度を取っている。従って、長崎ランタンフェスティバルは「伝統」を極める道で進んでいるのである。

第二は、日中の祭の背景の違いによるものである。中国灯会における特色として、よく時代を謳歌する作品が展示されており、祭の開催当地（省や市）の繁栄を讃える言葉が大きな文字で書かれ、ランタンの飾りと一緒に光り輝いている。長崎の華僑の9割は福建系なので、同じ福建省のアモイの今年のランタンを例とすると、「龍騰九州・春滿兩岸」^(注1)を主題として、「輝煌三十年」^(注2)、「盛世中華・魅力厦門」^(注3)などの文字を付けたランタンが展示されていた。しかし、長崎では時代・繁栄を賛美する言葉は全く無く、今回多く書かれていたのは、東日本大震災を受けての「がんばれ日本」の応援の言葉であった。時節柄、ということもあるが、こうしたイデオロギーの影響の有無が、中国と日本の祭の全体的な違いでもある。中国の祭の主催者は基本的には行政なので、政治の色が濃厚である。

日本の祭は市民を主体にしているため、市民参加の度合いが強く（例えば、市民団体の出演が中心であることや、公募制の市民ボランティアの参加など）、政治的宣伝とは全く関わっていない。

結論として、同じ「灯会」であっても、中国のものとは比べ、長崎のそれはもっと「伝統的な中国風」を演出した特徴を持っており、現代中国灯会とは、はっきりと区別されるものであるといえる。

賑やかな祭の現場で、中国人観光客は意外と少なかった。今後の長崎は、中国からの観光客を増やすために、「中国では味わえない、伝統的な中国風」の雰囲気強調してアピールすれば、中国人観光客にとって魅力的な観光地であることが伝わるのではないかと考える。

(注1) : 「中国全土は活気のある龍の年を迎える。本土と台湾を含める兩岸にも春が訪ねてくる。」という意味である。ここでの「九州」は、古代から伝承してきた言い方で、中国全土を示す。

(注2) : 「三十年の発展によって著しい成果を達成できている。」という意味である。

(注3) : 「中国は盛世であり、厦門（アモイ）は魅力的である。」という意味である。